

暁星学園（東京・千代田）

で小学校からフランス語を学びました。小学校2年生のときに、学園内に、在日フランス人の子女を受け入れる「暁星学園国際部日仏科」（現、東京国際フランス学園）ができて、放課後、フランス人の子供たちと一緒に学び、遊びました。

英語を習い始めると、名詞に性別がないなど違和感を感じたことを思い出します。大受験でも、外国語はフランス語を選択しましたから、今でも、英語よりフランス語の方が得意です。もっとも話す機会はほとんどありません。

さて、そのフランスは、世界に冠たる原子力大國で、私が専門とする放射線医学でも

がん社会 を診る

中川 恵一



イラスト・中村 久美

フランスでもがん患者「減少」

1903年、キュリー夫妻は、ウランが発する放射線を発見したアンリ・ベクレル（フランス人）と共に、ノーベル物理学賞を受賞します。さらに、1911年には、ラジウムとポロニウムの発見などの理由で、マリイがノーベル化学賞も受賞。パリ大学初の女性教授職に就任し、キュリー研究所を設立しました。

より、2割も患者が減っているそうです。

フランス最古の歴史を持つ新聞「ル・フィガロ」は、昨年春の初回のロックダウンによって、今後数年間で最大6000人もがん死亡がふえたと報じています。現在も続いている2回目のロックダウンを含めた影響は計り知れませんが、

フランスでも報じられており、世界的な現象と言えるでしょう。

世界をリードしています。

1895年にレントゲンが

X線を発見した翌年、世界で

初めて放射線治療を実施した

のも、リヨンの医師、デスペ

ーニユでした。さらに、キュ

リー夫妻が1898年にラジ

ウムとポロニウム（マリイ・

キュリーの祖国、ポーランド

に因む）を発見すると、ラジ

ウムは放射線治療の主役とな

りました。

キュリー研究所のパリ病院

は世界有数のがん専門病院で

すが、今、がん患者の「減少」

に頭を悩ませています。同病

院のフェロン医師によると、

コロナによる「受診自粛」に

がんは症状を出しにくい病

気です。たとえ体調は絶好調

であっても、検診や検査は必

要です。がん検診は不要不急

ではありません。

（東京大学病院准教授）